様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6月　3日現在

機関番号：32612
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520059
研究課題名（和文）　道の宗教性と文化的景観

研究課題名（英文）　Religiosity of the Road and Cultural Landscape

研究代表者
鈴木　正崇（SUZUKI　MASATAKA）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：10126279

研究成果の概要（和文）：本研究は、「道の宗教性」という観点から、「文化的景観」との関連を探ることによって民俗宗教の再構築や現代民俗の生成を検討する試みであった。研究を通じて、「道の宗教性」がもつ創造性や、「文化的景観」をめぐる新たな民俗の生成、遺産化をめぐる諸問題が浮き彫りにされ、動態的な宗教民俗学の構築へと展開することが可能になった。

研究成果の概要（英文）：This study has been aimed at the reconstruction of folk religion or the generation of modern folklore by researches relevant to “Cultural Landscape” from the viewpoint of “Religiosity of the Road”. The results have made clear the issues regarding the creativity of “Religiosity of the Road”, the generation of new types of folklore relevant to “Cultural Landscape” and the inclination toward becoming heritage, which has made possible to construct more dynamic style of religious folklore.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：宗教民俗学、宗教人類学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：宗教学、民俗学、文化人類学、道の宗教性、文化的景観

１．研究開始当初の背景

「文化的景観」の概念は、ユネスコが世界遺産の認定にあたり、文化遺産と自然遺産を繋ぐ第三の概念として導入したことから、急速に広まった。日本でも世界遺産条約の改定に対応して、平成 17 年 4 月 1 日から、文化財保護法に「重要文化的景観」の選定制度が加えられ、「文化的景観」には、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」（文化財保護法第 2 条第 1 項第 5 号）という定義が与えられた。しかし、この定義には、景観の持つ宗教性の位置付け、特に「宗教的景観」の観点が希薄である。本研究は、人間の日常的実践に欠かすことのできない「道」に注目し、従来試みられなかった「道の宗教性」という観点と、「文化的景観」の相互作用を通じて、民俗宗教が構築する意味世界がどのように生成し消滅するか、或いは再創造へ向かうのかを再考するものであ

る。本研究は、「空間の表象に関する宗教民俗学的研究」（科学研究費補助金・基盤研究Ｃ・平成 18 年度～19 年度、代表者：鈴木正崇）を踏まえ、「表象」に実践の観点を盛り込み、「道」と「文化的景観」を焦点化し、民俗宗教を通して動態的に地域社会を描くことを試みた。

２．研究の目的

本研究は、「道の宗教性」という観点から、「文化的景観」との関連を探り、民俗宗教の再構築や現代民俗の生成を検討する試みであった。「道の宗教性」は新造語で、様々な機能を持つ道が独自の宗教性を持って立ち現れてくるとの予想を持って設定した。道を歩くこと、風景を見ること、大地に触れること、音を聞くことなどの身体性の経験と過去と現在を繋ぐ歴史的記憶の想起を通じて何かが変わる。その一部は宗教性と呼ぶものに結びつく。巡礼はその典型であるが、道を媒介にした主題は、「道の儀礼」、世界遺産、芸能の「道行き」、ストリート文化、イベント化などの主題へと広がる。「道の宗教性」を顕著に表わす聖地巡礼も元々は娯楽や観光の要素を多く含みこんでおり、道を主題とする観光化やイベント化と連続性を持ち、再び宗教性に回帰する場合もある。「道の宗教性」の概念は、過去と現在を繋ぐ新たな民俗の生成の過程を明らかにする。

一方、「文化的景観」とは正式には世界遺産の登録にあたって 1992 年にユネスコによって提示された新しい概念で、「自然と人間の営みによって形成された景観」と定義されている。あくまでも文化遺産の中に含まれる下位概念である。これによって、世界遺産の登録リストは西欧社会から広く展開して、アジア・アフリカ・太平洋へと広がった。日本の「紀伊半島の霊場と参詣道」（2004）もその一つである。従来の聖地（霊場）と道（参詣道）が「遺産化」という枠組みの中で「文化的景観」に読みかえられたのである。「遺産化」の動きは、地方行政、国家、国際機関など、ローカルとナショナルとグローバルの相互の関係を流動的した。一方、日本では 2004 年に「文化的景観」は国内法である文化財保護法の中に枠組みと概念が組み込まれたが、対象が生業や生活とされ、棚田など農業景観がその代表となった結果、世界遺産の枠組みとは大きなズレが生じた。ただし、「文化的景観」の導入によって、自然と人間の相互作用が見直され、景観の認識に新たな視点が加わり、環境保全の意識が生まれたことも事実である。地域の文脈を重視して文化の多様性を許容する動きが定着し、民俗学や文化人類学の主題として「文化的景観」を取り上げる研究も増えてきた。

また、「文化的景観」を特定の行政用語に限定せず、広く人間が作り出して意味と解釈を与える景観と考えることも研究の可能性として開かれている。広義の「文化的景観」は地域社会が「外部」との相互交渉を活発化させ、道や景観を「資源」として流用し、人々の絆を再構築する契機となる場合もあれば、文化行政の関与で政治性を帯びた道や景観が地域住民との複雑な葛藤を引き起こすこともある。多岐にわたる研究の方向性を収斂させるために、本研究は「文化的景観」と「道」との関連に絞り、「道の宗教性」の生成・消滅・創造を考察するという視点を中核に置いた。ただし、「文化」の概念自体も、21 世紀に入って価値付けや評価が加わって大きな意味転換の時を迎えていることに留意する必要がある。

３．研究の方法

本研究の具体的な進め方としては、「巡礼」「祝祭」「交換」「記憶」「芸能」などを統一的に把握して、「道の宗教性」と「文化的景観」の関連を明らかにして、動態的な地域研究に基づいた宗教の研究を目指した。ただし、宗教ないしは宗教性から離れても、「道」が主題である限り、現代民俗の生成と見られる調査は許容することにした。対象地域は各々の継続調査地である山形県遊佐町、和歌山県熊野三山、四国遍路霊場、福岡県篠栗町、石川県気多・気比、長崎県長崎市出島・五島市、静岡県南伊豆、静岡県森町、沖縄県那覇市などである。

研究代表者・鈴木正崇は各地での調査を継続する一方、研究協力者として、浅川泰宏、中山和久、市田雅崇、織田竜也、宮坂清、谷部真吾、宮下克也の 7 名を要請し、共同研究によって考察の深化を試みた。

４．研究成果

本研究の成果として 2011 年 3 月に鈴木正崇（編）『道の宗教性と文化的景観 研究成果報告書』を発行した。研究代表者である鈴木正崇と研究協力者 7 名による、計 8 本の研究論文を収録している。著者名と題名は以下の通りである。

鈴木正崇「熊野における聖地の特性と道の宗教性の変容」

浅川泰宏「虚空の道の宗教的景観―四国遍路 23 番薬王寺から室戸岬に至る道を歩く―」

中山和久「巡礼の景観―篠栗新四国霊場を事例として―」

市田雅崇「峨山道をめぐる道の宗教性」

織田竜也「変容する景観―長崎市の「まちなか再生計画」と大河ドラマ『龍馬伝』―」

宮坂清「農的景観と観光―南伊豆への移住者の実践―」

谷部真吾「祭りの変化と道の宗教性―見付天神裸祭における 1960-61 年の変化を事例として―」

宮下克也「〈首里らしさ〉と真正性の問題―龍潭通りの景観形成運動から―」

本報告書の全体を通じ、著者それぞれが共通の問題意識に依拠しつつ日本各地の固有の背景をもつ「道」や「景観」を対象として論じることにより、道がいかに宗教性を帯びたものとして立ち現れうるか、またそれが現代のグローバルな文脈においていかに「文化的景観」と接続するかが、明らかになった。

このうち、研究代表者である鈴木正崇は、熊野の聖地としての特性を歴史的経緯を通して考察すると共に、聖地に至る「道の宗教性」の変容に注目して、熊野詣の原動力の形成過程を、縁起から物語へ、さらに祭りへの展開を組み込んで考察した。そして、熊野の聖地と参詣道が、現代では「文化的景観」として資源化されるに至った経緯を検討した。

その結果、まず聖地としての熊野の生成と人びとの語りや経験との関係が明らかになった。聖地は現実の地理的制約を越えて社会的実在として言説空間の中に立ち現われる。そこには「現実の聖地」と「観念の聖地」の相乗作用が生じて、聖地は歴史と記憶の貯蔵庫の相貌を帯びる。聖性を確信する人々によって維持されるのが聖地であるという当たり前の認識が出発点である。そして、信奉者の発生と聖地を結びつける役割は神話的な語りが担うのであり、聖地は神話や伝説を参照することで場所として再確認される。「場所をめぐる言説」が「場所の聖化」にとって重要であり、言説が真実か否かにかかわらず、場所をめぐる物語という相貌をとる。聖地・熊野の個性は、このような原理の組み合わせによって歴史的に形成されてきた。基本的な道筋を仮に想定すれば、

特定の場所の聖性を認識
→ 物語ることで聖地が確立
→ 聖地を歩く・見る・聴く・考える
→ 聖性の顕現の再認識
→ 様々な表象作用
→ 新たな語りの生成

といった循環の連鎖が考えられよう。時代によって強調される要素は異なり、循環の連鎖の道筋も変化するが、聖地生成の根源に「道の宗教性」があったということは言える。

以上のような状況に対して、近代の語りとして、「道」を主題にして登場したのが世界遺産であり、特に文化遺産とその中に組み込まれた「文化的景観」の概念であった。大正時代には徒歩による熊野詣がほぼ終了し、古道は単なる移動の手段としての生活道で、木材を運び出すために利用する山道となっていた。熊野詣は忘れさられていた。道の再発見は、中辺路の歴史的価値を正式に認めた国による 1977 年の「歴史の道」の指定だった。これを受けて地元では 1978 年に「熊野古道史探会」が結成され、中辺路を歩くだけでなく、歴史の勉強や道の保全に取り組んできた。熊野古道の価値を再発見したのは国であり、それに地元が反応し、地方行政が行動を起こすという経緯をたどった。つまり、熊野古道は「創られた伝統」を実体化したのであり、行政関係者の取り組み、国による「歴史の道」選定などの文化財としての位置付け、地域社会の地道で継続的な活動などで復活を遂げた。勿論、地元の協力は地域社会の崩壊に対する危機意識があり、活性化を願っての起爆剤となることを期待してのものであった。

このように、熊野古道をめぐっては語りや表象によって文化の再構築が行われ、その中核には「道の宗教性」が活用されている。中辺路や大辺路では王子、伊勢路では地蔵や塚、小辺路では大峯奥駈道の靡が「語り部」の話題の焦点である。文化的景観の「信仰の山」の権威付けはさほど効果を発揮したとは思えないが、地元の人々にとっては、熊野古道の中にある信仰的要素が過去と現在を繋ぐ結節点であり、「語り部」はこれを資源として文化資本に変え、語りによって文化遺産をリアリティー溢れるものにしている。そこには常に「真正性」を再生産していこうとする意志が働く。しかし、地元の人々にも様々な利害関係があり、宗教者、観光客、地方行政・国家や政府・国際機関との葛藤も生まれている。世界遺産は文化の評価に関わるがゆえに格差やランク付けを生み出す。熊野古道については各辺路での「文化」の言説は多様である。また、地元の人々にとっては、聖地・熊野、死者の国・熊野といわれても、実際には日常の生活の場である。文化的景観の概念は、なにげない風景に差異を持ち込み、価値評価によって格差を生じさせることになった。また、保護・保全といわれても、地元の生活者にとっては青天の霹靂であり、日常生活が規制されることで不自由が生じる。その結果、三重県側に見られたような過激な世界遺産反対運動も繰り広げられることになった。日常の変化、伝統の変質あるいは観光化などの変動の中で、地域社会で文化遺産を見出し、いかに発展させていくかが問われた。地元の主体性と多様性を維持しつつ、地域固有で、国民が共有し、世界人類に普遍という、ローカル（local）、ナショナル（national）、グローバル（global）を繋げる試みは実に困難な課題である。社会の変化に合わせて、文化遺産のあり方は柔軟に変わるべきであろう。

現代世界に広がる「遺産化」は、再帰性

（reflectivity）と資源化（resources）を二大原理として持つ。過去を問い直し再考し資源として活用する。その中核に据えられている多義的な「文化」の概念は、政治・経済と結びついて、戦略的に使用され流用されるようになってきた。また、「文化」は経済と結合して商品化され地域振興策に活用される。文化的景観という概念は、「遺産」や「文化財」と結びついて今後さらに多様な展開を遂げるであろう。日本は熊野・高野・大峯といった紀伊山地の霊場を文化的景観として認識する方法として、「信仰の山」という視点を提起した。その根底には山・川・森・石・瀧から、そこに生息する草木虫魚、そして人間を含めて全てのものに霊魂が宿るというアニミズム世界がある。人間もまた広い意味の自然の一部であり、全てのものに「いのち」があるという世界観を、「信仰の山」として世界へ発信し、環境保全や自然保護の論理として説いたことには大きな意義があった。アニミズム世界は地域固有であるが、普遍性を持つ言説に組み替えていく努力が今後さらに必要とされるであろう。その可能性を担うのが、吉野・熊野に発生し、山岳信仰を中核に形成された修験道であり、アニミズムを体系化して、普遍性をもつ仏教などと接合し、民衆の願いをかなえる役割を担ってきた。この地域における個性的な聖地の形成は日本独自の修験道の発展に負う所が大きい。自然との深い交流から生まれ、体験を重視する修験道の論理を如何に構築して提示するか、文化的評価はいかなるものか、そして社会との関わりをどのようにするのかは今後の課題である。

熊野は古代以来、信仰によって地域性（locality）を全国に広げることに成功してきた。現代社会では信仰だけでなく、別の観点や領域から普遍性を構築して広めていく必要がある。そのためには地元の人々が長い間育んできた「民俗知」の創造的な掘り起しが重要である。

以上のように、本研究を通じて、「道の宗教性」がもつ創造性や、「文化的景観」をめぐる新たな民俗の生成や遺産化をめぐる諸問題が浮き彫りにされ、動態的な宗教民俗学の構築へと展開することが可能になった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 鈴木正崇、『澁澤民間学』の生成―澁澤敬三と奥三河、国際常民文化研究機構年報、査読無、第１号、2010、170-182 頁。
② 織田竜也、諏訪の御柱祭、季刊民族学、国立民族学博物館、査読無、132 号、2010、61-72 頁。
③ SUZUKI Masataka, Kumano Beliefs and Yudate Kagura Performance, Cahiers d’Extrême-Asie, Ecole francaise d’Etêrme Orient,Centre de Kyoto,Vol.18, 2009,pp.195-222.査読無
④ 鈴木正崇、生と死の相克―熊野からのメッセージ―、国文学 解釈と鑑賞（特集続・「生と死」を考える）、ぎょうせい、査読無、74 巻 8 号、2009、132-145 頁。
⑤ 鈴木正崇、大峯山の修験道―自然とともに生きる信仰の実践―、季刊民族学、査読無、第 127 号、2009、3-29 頁。
⑥ 谷部真吾、所作と伝承―見付天神裸祭における行事構造の解釈をめぐって―、HERSETEC、査読有、Vol.3 No.2、2009、13-32 頁。
⑦ 鈴木正崇、日本宗教と儀礼テクスト、日本における宗教テクストの諸位相と統辞法、「テクスト布置の解釈学的研究と教育」第４回国際研究集会報告書、名古屋大学大学院文学研究科、査読無、2008、107-112 頁。
⑧ 鈴木正崇、熊野信仰と湯立神楽、宗教民俗研究、日本宗教民俗学会、査読無、第 18 号、2008、26-46 頁。
⑨ 谷部真吾、地域の再編と祭りの担い手たち―遠州森町の市町村合併反対運動をめぐって―、哲学、査読有、119 集、2008、203-231 頁。
⑩ 谷部真吾、祭りにおける社会統合機能に関する覚書―遠州・森の祭りの戦中期を事例として―、HERSETEC、査読有、Vol.2 No.2、2008、15-37 頁。
⑪ 織田竜也、交易港と異文化空間－長崎港の機能と解釈－、哲学、査読有、119 集、2008、147-170 頁。
⑫ 浅川泰宏、創出される表象空間－遍路道再生運動の事例から－、哲学、査読有、119 集、2008、35-64 頁。

〔学会発表〕（計 8 件）

① 鈴木正崇、熊野三山歴史講座「聖地・熊野の真髄」、熊野三山協議会、2010 年１月 21 日、熊野本宮世界遺産センター。
② 鈴木正崇、女人禁制をめぐる諸問題、第７回「石川の歴史遺産セミナー」＜女性をめぐる宗教世界＞、2009 年 7 月 25 日、石川県立歴史博物館。
③ 鈴木正崇、地域研究とオーラルヒストリー、三田社会学会 2009 年度大会公開シンポジウム（慶應義塾創立 150 年記念シンポジウム）、2009 年 7 月 11 日、慶應義塾大学（三田）。
④ 鈴木正崇、企画公演「特集・梓弓」解説、

日本芸術文化振興会国立能楽堂４月公演 2009 年 4 月 29 日、国立能楽堂。
⑤ 鈴木正崇、聖地・熊野の真髄、国際熊野学会主催・第二回熊野フォーラム熊野の世界遺産の魅力を語る、2009 年 1 月 10 日、明治大学・リバティホール。
⑥ 鈴木正崇、熊野信仰と湯立神楽、アジアにおける女性の地位の比較史的考察－疫病・触穢思想・女人禁制・祭礼芸能、2008 年 10 月 25 日、湯島ガーデンパレス。
⑦ 鈴木正崇、日本宗教と儀礼テクストーテクストとして読む民俗宗教、日本における宗教テクストの諸位相と統辞法・名古屋大学グローバルＣＯＥ「テクスト布置の解釈学的研究と教育」第４回国際研究集会、2008 年 7 月 20 日、名古屋大学。
⑧ SUZUKI Masataka, Kumano Beliefs and Yudate Kagura Performance; Shugendo:the History and Culture of a Japanese Religion ; Columbia Center for Japanese Religion, Columbia University ; Columbia University, New York ; 2008/04/26.

〔図書〕（計 10 件）
① 宮家準（編著）、鈴木正崇（著）、山岳修験への招待、新人物往来社、2011、執筆 31-46 頁。
② 浅川泰宏・星野英紀、四国遍路－さまざまな祈りの世界－、吉川弘文館、2011、全 211 頁。
③ 鈴木正崇、湯立神楽のコスモロジー－遠山霜月祭を中心に－、篠田知和基（編）、楽瑯書院、水と火の神話－「水中の火」－、2010、311-360 頁。
④ 鈴木正崇（編著）、東アジアにおける宗教文化の再構築、風響社、2010、全 484 頁。
⑤ 鈴木正崇（編著）、東アジアの民衆文化と祝祭空間、慶應義塾大学出版会、2010、全 447 頁。
⑥ 谷部真吾、昭和 36 年以降に参加した町内について、見付天神裸祭保存会（編）、見付天神裸祭の記録－「以前の裸祭」の調査報告－、2010、187-190 頁。
⑦ 鈴木正崇、聖地・熊野の真髄、篠田知和基（編）、楽瑯書院、天空の神話－風と鳥と星－、2009、139-206 頁。
⑧ 織田竜也、世界観の構造－流動する生命の行方、織田竜也・深田淳太郎（編）、春風社、経済からの脱出、2009、4-24 頁。
⑨ 浅川泰宏、祓いの威力・払いの魔力－現代日本の民俗宗教、織田竜也・深田淳太郎（編）、春風社、経済からの脱出、2009、139-165 頁。
⑩ 浅川泰宏、巡礼の文化人類学的研究－四国遍路の接待文化、古今書院、2008、全 457 頁＋xiii。

［その他（報告書）］（計１件）
① 鈴木正崇、史跡鳥海山保存管理計画書、山形県遊佐町、2011、19-43 頁

６．研究組織

(1)研究代表者
鈴木　正崇（SUZUKI　MASATAKA）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：10126279

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者
浅川　泰宏（ASAKAWA YASUHIRO）
埼玉県立大学・専任講師
研究者番号：90513200

市田　雅崇（ICHIDA MASATAKA）
国学院大学・日本文化研究所・客員研究員

織田　達也（ODA TATSUYA）
長野県短期大学・助教
研究者番号：00431841

中山　和久（NAKAYAMA KAZUHISA）
人間総合科学大学・専任講師

宮坂　清（MIYASAKA KIYOSHI）
慶應義塾大学・非常勤講師

宮下　克也（MIYASHITA KATSUYA）
北里大学・非常勤講師

谷部　真吾（YABE SHINGO）
名古屋大学大学院文学研究科グローバル COE・研究員
研究者番号：80513746